

インド思想史学会 第29回学術大会 (オンライン)  
2022年12月24日 (土)

プログラムと発表要旨

Association for the Study of the History of Indian Thought  
The 29th Annual Conference (online)  
24 Dec 2022 (Sat.)

Programme and Abstracts of Papers

オンライン開催のため、事前の参加申込が必要です。申込方法は同封の別紙またはメール連絡を参照ください。

※ 参加費は無料です。また懇親会は開催いたしません。

連絡先： 〒606-8501  
京都市左京区吉田本町 京都大学文学研究科インド古典学研究室気付  
インド思想史学会事務局  
TEL: 075-753-2460 (横地)  
E-mail: hit\_office@googlegroups.com  
Website: <https://indosg.org/>

※ 本状は郵便での送付に先立ちメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない場合は、メールアドレスが未登録ですので事務局までお知らせください。

# インド思想史学会 第29回（2022年度）学術大会のご案内

インド思想史学会会長 赤松明彦

インド思想史学会第29回学術大会を下記の通り開催いたします。皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日： 2022年12月24日（土）13:00から  
（理事会 11:00～11:30）

開催方法： Zoomによるオンライン開催  
（12:30から開場しています。なるべく早くご入室ください）

## 研究発表者および発表題目

13:00～13:50 星宮康子（東洋大学大学院文学研究科博士後期課程）  
「なぜ医療行為が必要なのか—『チャラカ・サンヒター』の主張する不適切な時の死—」

13:50～14:40 廣瀬 勤（京都大学大学院博士課程）  
「sattraの春分と夏至の儀礼に関する記述について」

~~~~~ 休憩 ~~~~~

15:10～16:00 齊藤 茜（Österreichische Akademie der Wissenschaften 研究員）  
「anyathāの普遍性と知覚論における意義—知覚と錯誤の本質的な同一性について—」

16:00～16:50 小倉智史（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）  
「アクバル版 Laghuyogavāsiṣṭha ペルシア語訳における翻訳者ファルムリーの思想的立場—サリーム版との比較を中心に—」

~~~~~ 小休憩 ~~~~~

総会 17:00～17:30（引き続き同じURLにて、Zoomによるオンライン開催）

# Association for the Study of the History of Indian Thought

## Programme of the 29th Annual Conference

AKAMATSU, Akihiko President

The 29th annual conference of the Association is to be held as follows. We will cordially invite you to the conference.

Date and Time : 24 Dec 2022 (Sat.), from 13:00  
(Board Meeting: 11:00 — 11:30)

Method : Online Meeting by Zoom (The meeting is open from 12:30)

### Programme

13:00 — 13:50 HOSHIMIYA Yasuko (Doctoral Course Student, Toyo University)  
“Why we need medical treatments” [in Japanese]

13:50 — 14:40 HIROSE Tsutomu (Doctoral Course Student, Kyoto University)  
“On the rituals of the vernal equinox and summer solstice in the sattrā”  
[in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

15:10 — 16:00 SAITO Akane (Research Fellow, Österreichische Akademie der Wissenschaften)  
“Anyathā and its Significance in the Theory of Direct Perception; and the Essential Identity of Perception and Error” [in Japanese]

16:00 — 16:50 OGURA Satoshi (Associate Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies)  
“Philosophical standpoint of Farmulī, the translator of a Persian translation of the *Laghuyogavāsiṣṭha* composed at the Akbar court” [in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

Plenary Meeting 17:00 — 17:30 (Continued in the same Zoom meeting)

## なぜ医療行為が必要なのか

### —『チャラカ・サンヒター』の主張する不適切な時の死—

星宮康子（東洋大学大学院文学研究科博士後期課程）

Carakasamhitā（以下CS）1.9では、疾患の治療に関わる4つの重要な要素、つまり①医師、②医療資源、③患者に近い人、④患者について説明している。そして、特に熟達した医師は、病人たちには親切で優しくし、治ったことに喜び、そして死に逝く者へは黙過することがそのあり方であると述べられている。CSは、治療を開始する前には病人の状態を正確に把握しなければならないと説き、その理由のひとつに死相が認められたならば治療に着手してはならないと明言している。つまり、治療手段がない疾患に対する治療は、それを放棄しない限り財産や威厳などを失うので硬く禁じられているのである。

CSに記述されているこれらの医師の態度について、これまで、病人を放置する理由が議論されてきた。この時代の医師は、死にゆく病人に対して積極的な治療をしなかったというだけで、対処療法は行われたので病人を完全に放置したわけではないと論じられている。あるいは、治療可否の判断は余命とともに議論されるため、余命と死の兆候をどのように観察し認識するのかということが着目されてきた。

チャクラパーニダッタはĀyurvedadīpikāにおいて、死とは本来の状態（prakṛtistha）にあるもので、死に近づく者たちに対して医療を施すことをしてはいけないと説明している。注釈者がそのように説明するのは、CSが、死（marāṇa）は本来の状態（prakṛti）であると述べているからであろう。

CSでは、「医療」は役に立たないもの（akiñcitkaram）であると主張する人物が登場する。彼の主張は、治療の有無にかかわらず、人は死ぬし、治療しなくても回復する人もいるというものである。CSは、死というものは不可避であることを認めつつ、一方で治療手段がある疾患に対しては、治療を行うべきであると反論する。死そのものに対しては抗えないが、CSで説かれる死は「適切な時の死」と「不適切な時の死」の2種に分けられ、前者に対する治療は許されない。「不適切な時の死」とは、健康に害がある行為や治るはずの病気を放置することで、本来ならば生きることができた時間を失って迎えた死である。

そこで、CSは「不適切な時の死」を阻止するための医療と、「適切な時の死」を遂げるための医療とを明言するのである。

## sattraの春分と夏至の儀礼に関する記述について

廣瀬 勤（京都大学大学院博士課程）

ヴェーダ祭式における *sattra* は、一般的には、「12日あるいは13日以上続くソーマ祭」として理解されている。この見方は、*śrautasūtra*（おおよそ400 BCEを中心に編纂されたヴェーダ祭式の綱要書）において確立されたものである。しかし、*sattra*の本来の姿は、一年周期のものであったと考えられる。*sattra*は*dvādaśāha*（12日祭）で締めくくられ、これが冬至の時期にあたると考えられる。*mahāvratā*は*dvādaśāha*の11日目に行われる儀礼であり、一年の締めくくりとしての側面もある。ただし、Asko Parpola [2015: 137; 188; 250] は *mahāvratā*を春分と秋分に結び付けている。また、Parpola [2000: 109f]は、*navarātri*（9夜からなる祭り）と呼ばれる *Durgā*神のための祭りが、今日では*āsvina*月の最初（9月から10月、秋分にあたる）と、*caitrā*月の最初（3月から4月、春分にあたる）に行われることを述べ、一年間からなる祭式との関連を指摘している。

*sattra*の本来の姿を知るためには、*śrautasūtra*より古い段階の資料にあたる必要がある。その資料とは、主に*brāhmaṇa*文献（おおよそ800—600 BCEに編纂された祭式やマントラについての議論に関する文献）である。特に、黒 *Yajurveda* 系統の *Maitrāyaṇī-Saṃhitā* (MS) と *Kāṭhaka-Saṃhitā* (KS) と *Taittirīya-Saṃhitā* (TS) の散文部分、TSの補遺文献と考えられる *Taittirīya-Brāhmaṇa* (TB)、及び、*Sāmaveda* 系統の *Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa* (PB) と *Jaiminīya-Brāhmaṇa* (JB) が *sattra*の理解のために重要である。*sattra*について記述がみられる箇所はそれぞれ、KS 33—34巻、TS 7巻、TB 1.2.2—6; 2.3.5、PB 4—25章、JB 1.66—3.386である。

一年を通じて行われる *sattra*を理解するために、分点と至点に行われたであろう儀礼の記述の考察が重要であるが、今回の発表では特に、MSとKSとTBとPBにおける春分と夏至との関係が推測される箇所を考察する。具体的にはMS 4.8.10, KS 30.5; 33.2; 33.4—5; KS 33.6, TB 1.2.2—3; 1.2.4, PB 4.5である。9日間からなる祭式、*viśvajit*と*abhijit*という特徴的な *stoma*の使用、*viśvant*（折り返し点）という語、*divākīrtya*、*mahāvratā*など、春分と夏至との関係を示唆しうる要素を考察する。

キーワード : *divākīrtya*, *viśvajit*, *abhijit*, *viśvant*, *mahāvratā*

## anyathā の普遍性と知覚論における意義

### —知覚と錯誤の本質的な同一性について—

齊藤 茜 (Österreichische Akademie der Wissenschaften 研究員)

知覚は間違ふ。マンダナ (660–720?) の知覚論を一言で言うとこれに尽きる。そしてその議論には殆どの場合 anyathā という概念が関わる。マンダナの知覚論は彼の著作の複数に跨って登場するが、直接知覚の定義が一から詳しく検討されるのは『命令の分析』(Vidhiviveka: 以下 VidhiV) においてである。彼はミーマーンサーの定義に基本的には従いながら、分別 (vikalpa, kalpanā) を絡め錯誤論へと自然に帰結させていて、そこにディグナーガ・ダルマキールティからの強い影響を見ることができる。敵論としてながら、仏教学説はマンダナが自身の哲学を構築するのに大きな貢献をしている。

ヴァーチャスパティミシュラは、上記 VidhiV への註釈 Nyāyakanikā においてマンダナの『ブラフマンの存在証明』(Brahmasiddhi: 以下 BS) Niyogakāṇḍa から一節を引用する。それは仮託 (āropa) についての短い言及であり、それ故に VidhiV における彼の主張の根幹を形成する「X を Y と認識する」に直接通じるものである。また BS 該当箇所の註釈 Tattvasamīkṣā ではマンダナの別の著作『錯誤の分析』(Vibhramaviveka: 以下 VibhramaV) に言及しており、註釈こそ残っていないものの彼がそれを読んでいたことは間違いない。このヴァーチャスパティの註釈は、VidhiV と BS と VibhramaV の (少なくとも彼が見出していた) リンクを私たちに示してくれる。

ところでマンダナの錯誤論といえば、彼が VibhramaV で展開するさまざまな khyāti 説が後の思想史に強烈な影響を残したことはよく知られている。その中でも VibhramaV で定説として掲げられた anyathākhyāti 説について、Kuppuswami Sastri 氏は BS (1937) の導入部 (pp. lxiii) で「錯誤論」(theory of error or erroneous cognition) の問題として次のように述べた。

In his *Brahmasiddhi*, Maṇḍana maintains that the Bhāṭṭa theory of *viparītakhyāti* should, for all practical purposes, be adequate even from the advaitic view-point and when the nature of the object of erroneous cognition is examined, this theory reduces itself to a form in which it is hardly distinguishable from the *anirvacanīya khyāti* of advaitins.

BS において anyathākhyāti 説は実は不二一元論的立場からも肯定される、これは正鵠を得た記述だろう。ではこれを彼の「知覚論」として裏付けることができるか。マンダナの錯誤論は、VibhramaV と BS Niyogakāṇḍa 中の数十ページにその核があるが、本発表ではそれとは別の部分、つまり直接には錯誤を語っていない周縁部からマンダナの思想に接近する。Sastri 氏によっては *iṣṭasādhana* の問題からのみ言及されている VidhiV に既に知覚論の原型があり、それが彼の晩年の著作とされる BS に繋がっている。これらの議論を確認しながら冒頭の「知覚は間違ふ」に回収される要素を整理し、不二一元論学派の認識論に多大な貢献をしたと評されるマンダナの錯誤論を知覚論との一貫性のもとに説明することができること、そのいわば「知覚=錯誤論」における anyathā の意義を考察する。

## アクバル版 *Laghuyogavāsiṣṭha* ペルシア語訳における

### 翻訳者ファルムリーの思想的立場

#### —サリーム版との比較を中心に—

小倉智史（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）

*Yogavāsiṣṭha* とは、ヴァールミーキに帰される思想文献である。*Vairāgya*, *Mumuksu*, *Utpatti*, *Sthiti*, *Upāśama*, *Nirvāṇa* の 6 つの *prakaraṇa* から成り、コーサラ国の王子ラーマと聖仙ヴァシシュタの長い対話の中で数多くの枠物語や寓話が紹介され、その内容を知ることで生きながらの解脱 (*jīvanmukta*) へと至る手段が探求される。その最も古いヴァージョンは *Mokṣopāya* というタイトルを持ち、10 世紀にシュリーナガルの中央に聳える *Pradyumnādri*（現在の *Hari Parbat*）で編纂されたと推定されている。元来 *Mokṣopāya* の思想的立場は特定の学派・宗派に依存しない一元論であったものの、中世期に同作品のリセンションが作られる中でヴェーダーンタ学派の思想の影響を受け、*Yogavāsiṣṭha* と *Laghuyogavāsiṣṭha* の 2 ヴァージョンが成立した。

*Laghuyogavāsiṣṭha* (LYV) がその内容ゆえにムガル帝国の皇族や一部ムスリムのスーフィーたちの関心を引いたことはつとに知られることである。まず 1597–98 年に皇子サリーム（後の第 4 代皇帝ジャハーンギール）が駐屯地のイラーハーバードで LYV のペルシア語訳の編纂を企図し、ニザームッディーン・パーニーパティー、パターン・ミシュラ・ジャージーブリー、ジャガンナート・ミシュラ・バナーラスィーの 3 名がこの翻訳を完成させた（サリーム版）。ここからそれほど時代を下らない 1602 年に、第 3 代皇帝アクバルは別途 LYV のペルシア語訳の編纂を命じ、ファルムリーという人物が完成させた（アクバル版）。パーニーパティーほかサリーム版の翻訳チームがどのような知的背景を持った人物たちだったのかという点については、Shankar Nair が検証を行っている (Nair 2020: 47–55)。他方アクバル版の翻訳者ファルムリーが何者であったのか、本人が「カビールの子」を自称している他には、いかなる証拠も確認されていない。訳文を検討する限り、パーニーパティーとファルムリーがともにイブン・アラビー (1240 没) の存在一性論に依拠して LYV で唱えられるヴェーダーンタ思想を解釈し、訳文を作り上げたことは疑いない。しかし一方で、サリーム版とアクバル版のテキストには、LYV の同一箇所を訳出する上で、異なる表現を採用している箇所もある。

発表者はダブリンのチェスター・ビーティー図書館所蔵写本とラホールのパンジャーブ公共図書館所蔵写本に基づいてアクバル版の校訂作業を進めているが、本発表ではサリーム版とのテキストの比較を行いつつ、翻訳者ファルムリーの思想的立場を考察し、パーニーパティーや二人のブラフミンとの立場の違いを論じたい。